

日本語の自称詞・対称詞の研究

The study on change of address terms in conversation

ニン ティ ニャン ヴァン

Ninh Thi Nhan Van

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 修士課程

キーワード : 自称詞, 対称詞, マンガ, 人間関係, 場面

Key words : First personal pronoun, second personal pronoun, manga, interpersonal relationship, scene

1. 研究目的

本研究では、日本のマンガにみられる自称詞・対称詞の用法を分析することを目的とする。日本社会における人間関係は、三宅 (1995) によると、自分を中心にし、ウチ・ソト・ヨソに分けて把握されるという。ただし、本稿では他称詞を考察の対象とせず、自称詞・対称詞を対象とするため、基本的には、ウチ・ソトの問題が大きくかわるものと考えられる。また、滝浦 (2015) では、「近接的」「遠隔的」とする心理的な「距離」を取り入れた考察もみられる。ウチ・ソトの関係と近接的・遠隔的とする心理的な距離の問題との整合性をどのように捉えるべきか、また、これに加えて上下関係がどのようにかわっているのか、さらにマンガというメディアにおいて、自称詞・対称詞はどのように使用され読者に伝えられているのか。本研究では、これらの視点から、自称詞・対称詞について分析を試みることにしたい。

2. 方法

本研究では、日本のマンガにみられる自称詞・対称詞を人称代名詞・役職名等下記の7種のカテゴリーに分類した上で、登場人物の性差と上下関係・親疎関係による自称詞・対称詞の使用状況について考察し、それらがマンガの場面によってどのように切り替えながら用いられているかという問題について考察する。

自称詞・対称詞の研究に取り組む場合には、日常的に交わされる自然な談話をデータとして用いる方法も考えられるが、自然な談話データでは談話の流れや参加者の人間関係と自称詞・対称詞の用法について分析する際に必要な情報が充分でないケースがみられる。そのため、情報がより明確

に見えるコンテンツを考察する必要がある。そのようなコンテンツの中でも、マンガは登場人物の人間関係・ストーリーの展開等が読者に伝えられるように構成されており、分析に必要な情報が示されていることが多い。また、従来マンガをデータとして用いる自称詞・対称詞の研究は管見の限り極めて少なく、先行研究には表れていない新しい知見を得ることができると考えられる。但し、ここでは、あまりにも現実からかけ離れた表現を用いる作品は対象とせず、あくまでも現代日本社会において現実にみられる日本語を中心に表現した作品を選ぶこととする。そのため、考察の対象は現実の社会生活を描いた作品であり、且つ2000年以降に出版されたものの中から選び、具体的には下記の12種に絞ることとする。

ひぐちアサ (2001) 『家族のそれから』

羽海野チカ (2002) 『ハチミツとクローバー』
第1巻

安野モヨコ (2004) 『働きマン』 第1巻

高橋しん (2005) 『トムソーヤ』

芦原妃名子 (2007) 『月と湖』

高嶋ひろみ (2008) 『未満恋愛』 第1巻

岸本ナオ (2008) 『雨無村役場産業課兼・観光係』 第1巻

ろびこ (2009) 『となりの怪物くん』 第1巻

冬目景 (2009) 『ももんち』

ヤマシタトモコ (2010) 『HER』

渡辺ペコ (2012) 『BODER』 第1巻

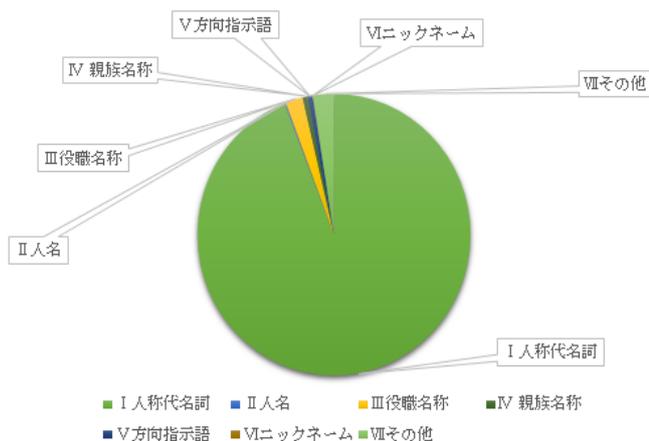
以上のような用例データに基づき、まず、収集データの全体的な構造の面から自称詞・対称詞を分析する。その上で、性差及び上下関係と親疎関係の視点から、ウチ・ソトの問題と近接的・遠隔的とされる心理的距離の問題との関係について述

べ、マンガの場面による自称詞・対称詞の切り替えの問題について考察を試みることにする。

3. 収集データからみる自称詞・対称詞の分析

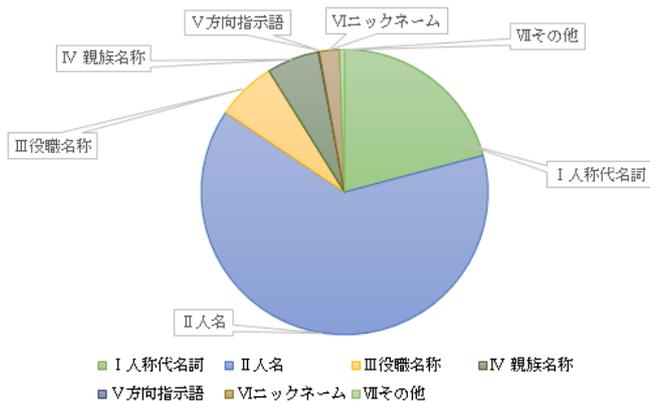
収集データからみる自称詞・対称詞の分析について、収集データはグラフ 1－自称詞の各カテゴリーとグラフ 2－対称詞の各カテゴリーで表している。

グラフ 1－自称詞の各カテゴリー



グラフから見ると自称詞では人称代名詞が各カテゴリーのうちで最も多く、92.53%を占めている。次は人名 3.08%である。

グラフ 2 - 対称詞の各カテゴリー



一方、対称詞は人名が 6 割、人称代名詞は約 2 割であり、自称詞と対称詞で大きな異なることがわかる。

4. 日本のマンガにみられる自称詞・対称詞の用法分析

性差については、表 1-1、表 1-2、表 2-1、

表 2-2 で性別に自称詞・対称詞を分けている。

表 1-1-性別による人称代名詞の自称詞の使い分け

人称代名詞	性別による使い分け	
	女性	男性
あたし	138	0
おれ	0	290
自分	0	0
ぼく	0	28
私	102	5
わたし	43	0
われ	0	1
オイ	0	2
わし	0	5

表 1-2-性別による人称代名詞以外の自称詞の使い分け

自称詞	女性	男性
個人名	1	0
役職名称	7	1
親族名称	10	4
方向指示語	2	2
ニックネーム	0	0
その他	0	0

表 2-2-性差による人称代名詞の対称詞

人称代名詞	性差による対称詞	
	女	男
あなた	16	4
あんた	43	11
おまえ	5	33
おめー	0	1
オメ	0	3
きみ	2	6
ご自分	1	0
てめ	0	2
てめえ	0	3
諸君	0	1

表 2-2-1 性差による人称代名詞の対称詞

	男	女
名前+親族名称	0	3
苗字	4	52
苗字+接尾辞	14	4
苗字+役職名称	1	11
名前	44	69
名前+接尾辞	36	23
略名	0	5
略名+接尾辞	4	6
役職名称	8	24
親族名称	44	26
方向指示語	1	0
ニックネーム	3	2
ニックネーム+接尾辞	8	1
ニックネーム+役職名称	0	1
数詞名詞	0	1

表からみると、自称詞では 男性と女性でそれぞれ使用する語が異なっているが、ほとんど人称代名詞に、性差の偏りが認められる。それに対して人称代名詞以外の 6 種の自称詞については、性差による使用傾向はみられる。

対称詞では女性は男性に比べて丁寧な表現を用いることが読み取れる。これは、日本語話者にとっては自明のことですが、日本語教育の場面等では、説明が必要となる場所であると考えられる。

上下関係については、自称詞では、通常目上は目下に対して人称代名詞あるいは親族名称を用いる、親族名称を用いるのは、相手が子供の場合に限られる。対称詞については、目下は目上に対して役職名称を用い、身近な相手に対しては、親族名称を用いることも可能である。

下記の図-1 は鈴木 (1973) を参考に、今回扱ったマンガ『ぼくだけが知っている』に見られる主人公らいちを中心とする人間関係の図である。

図-1 『ぼくだけが知っている』のらいちを中心としている人間関係

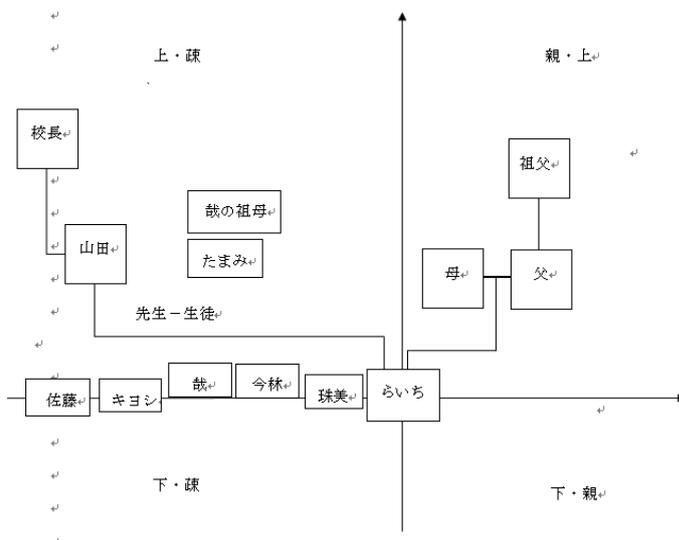


図-1 が親疎関係・上下関係を読み取って作成された。人公のらいちは、本来対等と考えられるクラスメート-らいちの左隣に並んでいる珠美・今林・はじめ・キヨシ・佐藤に対して上下関係を意識した対称詞を使い分けている。

親疎関係については、滝浦 (2015) を参考に、画面にある図を作成した。

図-2 対称詞のカテゴリー別の距離感

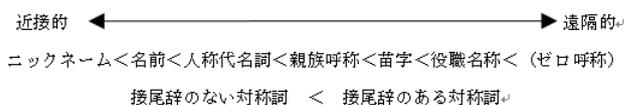


図-2 からみると、最も親しさを表す対称詞はニックネームであり、最も疎遠であることを示す対称詞は相手と呼ばない (ゼロ呼称) である。その間に、名前、人称代名詞、親族名称、苗字、役職名称が近接的から 遠隔的の順に並んでいる。但し、近接的と遠隔的の尺度はその序列に必ずしも従うわけではない。

続きまして、マンガの場面による自称詞・対称詞の切り替えについて、一例をあげて分析する。



例

ケンジ「...メグちゃんが...他人の男と暮らす

のが苦痛なのは...わかるけど

ボクは...っ ボクはっ

(...中略...)

10年 居させてくださいっ

メグちゃんもっ

今のオレと同年...なるしっ

それまでには...な...とか...」

『家族のそれから』 pp.118-123©2001 ひぐちアサ

例は、「家族のそれから」のケンジとメグが話しています。この二人は娘と義理の父親である。ケンジはメグの母親の主人です。日常 自分のこと

を「オレ」と呼んでいます。子どものメグに対して使用せず、代わりにボクを用いる。しかし、そのような状況の中で、「ボク」から「オレ」への切り替えがみられる。

切り替えの場面の聞き手はかわらずメグであるが、「ボク」から「オレ」に切り替えられた理由は、聞き手との関係がかわったためではない。この場面でケンジは、聞き手のメグに話しかけているというよりも、自分の気持ちを確認する一種のモノログとして用いている。モノログでは、話し手にとって、聞き手が意識の中から消えている。場面による切り替えは自称詞だけではなく対称詞にもみられる。

それは、相手を意識して発話する場合と、自己の考えに集中したり、驚いたりする場合等、相手との関係を意識せずに発話する場合とで、自称詞・対称詞の切り替えが現れることもある。

5. 考察のまとめと今後の課題

本研究では、日本語の自称詞・対称詞の用法について、日本の日常生活を扱ったマンガを用いて、その用法について分析を試みた。

収集したデータ（自称詞 616 例・対称詞 976 例）について、緒方（2015）を参考に 7 種のカテゴリに分類したところ、自称詞では 9 割が人称代名詞であった。一方、対称詞は人名が 6 割、人称代名詞は約 2 割 5 分であり、自称詞と対称詞で大きな異なりがみられる。

これらに基づき、性差と話し手と聞き手相互の上下関係・親疎関係の視点から分析を行った。

性差については、自称詞では男性と女性でそれぞれ使用する語が異なっており、対称詞では女性は男性に比べて丁寧な表現を用いることが読み取れる。これは、日本語話者にとっては自明のことではあるが、日本語教育の場面等では、説明が必要となる場所であると考えられる。

また、上下関係については、鈴木（1973）に基づき、上下分割線概念を取り入れて分析を行った。自称詞では、通常目上は目下に対して人称代名詞あるいは親族名称を用いるが、親族名称を用いるのは、相手が子供の場合に限られる。対称詞については、目下は目上に対して役職名称を用い、身近な相手に対しては、親族名称を用いることも可能である。

親疎関係については、自分を中心とするウチ・ソトの関係と近接的・遠隔的とする心理的な距離

が、どのように自称詞・対称詞の使用に対応しているかという視点から分析した。自称詞については、相手との距離とウチ・ソトの把握によって、たとえば男性の場合に「ぼく」「おれ」の選択が異なること等、期待する相手との関係に基づき呼称の選択が行われていることが分かる。対称詞についてもその点では同様であるが、その場合では相手や周囲に対する遠慮や配慮が影響することが明らかになった。

一方、場面によって、自称詞・対称詞が切り替えられることもある。これは、相手を意識して発話する場合と、自己の考えに集中したり、驚いたりする場合等、相手との関係を意識せずに発話する場合とで、自称詞・対称詞の切り替えが現れることもある。

たとえば、自己の考えに集中する場合は、ダイアログからモノログへと切り替えられており、これは、聞き手が意識の上で消去されてしまっていることを表しているものと考えられる。

今後の課題としては、自称詞・対称詞が役割語

としてどのように機能しているかという点からの分析や、ダイクシスとしての自称詞・対称詞の問題、さらに日本語教育の立場からのマンガを教材とする自称詞・対称詞の有効性について、検討を進める必要があると思われる。

主要参考文献

- [1] 緒方隆文 (2015) 「呼称のカテゴリー分析」『Jonai of hikushi Jogakuen University and Junior College』10号, p.7
- [2] 小林美恵子 (2002) 「職場で使われる「呼称」」『現代日本語研究会. 男性のことば・職業編』ひつじ書房
- [3] 滝浦真人 (2007) 「呼称のポライトネス―“人を呼ぶこと”の用語論」『言語』36号, 12, pp. 32-39
- [4] 滝浦真人・大橋理枝 (2015) 『日本語とコミュニケーション』NHK出版
- [5] 澤田治美・高見健一 (編) (2010) 『言葉の意味と使用―日英語のダイナミズム』鳳書房
- [6] 鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』岩波書店